地域と民俗

国立民族学博物館製作映像番組

『奄美大島の八月踊り』を巡って

１．長編映像番組
『奄美大島の八月踊り』の製作

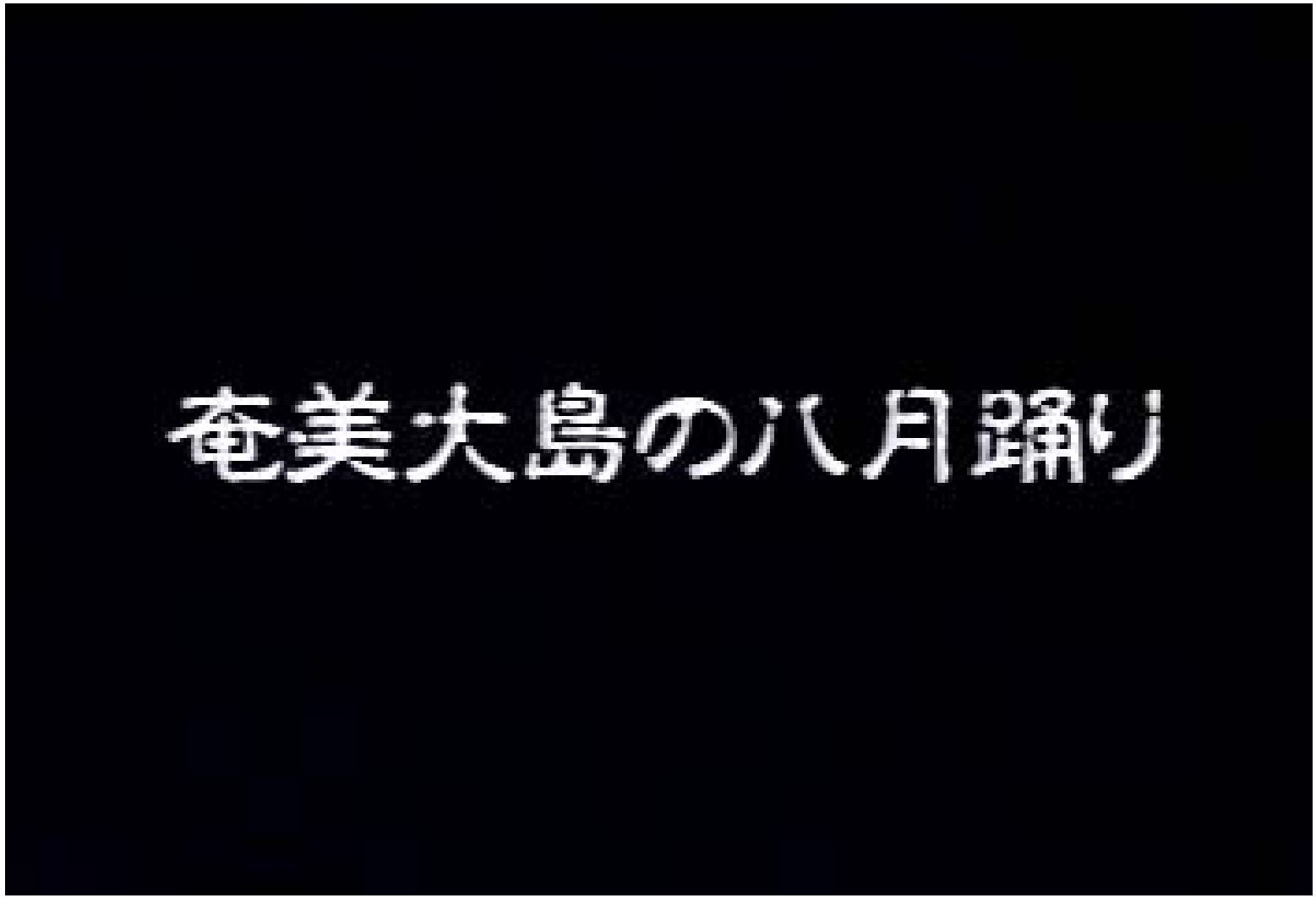
- 国立民族学博物館は、2004～5年に鹿児島県奄美大島で八月踊りの取材を行い、2007年に長編映像番組『奄美大島の八月踊り』を製作
- 八月踊りは、九州と沖縄の間に位置する奄美群島の代表的な芸能の一つで、奄美大島・喜界島・徳之島の各地で現在も行われている。
- 民博がどのような意図をもって、奄美大島の八月踊りの映像取材や番組製作を行ったか？
- 研究者の調査研究は、地域の社会や人々とどのように関わればいいか？

鹿児島・奄美・沖縄の位置

鹿児島
宮崎
大隅諸島
薩
南
諸
島
吐噶喇列島
鹿児島県
奄美諸島
東シナ海
西
諸
琉
球
諸
島
沖縄諸島
沖縄県
先島諸島
宮古列島
太平洋
南
西
諸
島
海
湾

喜界島
奄美大島
与路島
加計呂麻島
請島
徳之島
奄美諸島

『奄美大島の八月踊り』 *(国立民族学博物館 2007)*



『奄美大島の八月踊り』 *(国立民族学博物館 2007)*

鹿児島県奄美市笠利町城前田

２．八月踊りをどのように映像で捕捉するか
八月踊りの特徴１　芸態

- 踊り方の<u>構造</u>
  老若男女誰もが参加・集団的な・輪踊り…
- 歌・踊・太鼓の<u>三位一体</u>
  元歌＋共通歌詞(数百以上)…
- 男女の即興的な<u>歌掛け</u>
  八八八六音の歌詞・律音階…

八月踊の特徴２　歴史

『南島雑話』

- 19世紀には踊られていた

八月踊の特徴３　多様性

- **北部のスタイル　vs　南部のスタイル**
- **歌**：*旋律・音域が男女異なる／同じ*
- **歌い方**：*相手に被せる・テンポアップ…　／被せない・テンポアップしない…*

※ *地域毎の多様性*

八月踊の特徴４ 儀礼性

- <u>年中行事</u> *(旧暦八月の季節の変わり目・豊年祭...)* で踊る
- <u>ノロ(女性の宗教者)</u>*踊との関わり...*

３．伝承としての芸能の歴史
折口信夫の芸能史

- **折口信夫** *(1887～1953)*

或時代にこういう芸能が、と「時代区分的な見方」は困難

歌舞伎でも能でも、何れも何でもかでも取り入れた芸能の大寄せで、何がその芸能かは簡単に言われません

折口信夫『日本芸能史六講』

芸能の歴史と伝統

- 芸能の歴史 ≒

  前の時代の様々な芸能の影響が絡まりあって、新たな芸能が生まれることの反復による、<u>連続的な変化の過程</u>

↓

- ある時代の姿を「伝統」*(＝あるべき姿)*として固定して理解するのは困難

※ そもそも、「あるべき姿」を、<u>誰が、どう定めるか？</u>

※ 芸能の<u>歴史性を否定</u>してしまうのでは？

「伝承」としての芸能の歴史

- 芸能の歴史 ＝連続的な変化の過程＝<u>伝承</u>（≠ 伝統）

この場合、伝承とは…

時代それぞれの時代や社会状況の中で、前例を参照しつつもその都度再創造され、形式や内容など<u>様々な面で変化を来しながら上演が繰り返されていく</u>こと

笹原亮二『三匹獅子舞の研究』

※ その時々の事情に合わせて、<u>やり方を様々に変えながら演じ続けていく</u>のが「伝承」

伝承するのは誰か

- 芸能は、伝承*（様々に変化しつつ再創造されながら演じ続けて）*されてきた

⬇

- 芸能を伝承する主体
  ＝芸能を実際に伝承してきたのは、<u>どのような人々か</u>

※ 演者たちは、いかなる<u>考えや想い</u>を抱きつつ、それぞれの芸能を伝承してきたか？

４．島の人々にとっての八月踊り

八月踊には、芸態･歴史･多様性･儀礼性とは別の側面がある…

子供の頃、最も待ち焦がれた八月踊りは何よりの楽しみ
踊手が家に近づくと、「あ！やってきたぞ！」と色めきたつ
母は「芋の葉の露」と称する曲が好み…
経験者なら、どんな娯楽にも味わえない恍惚境ともいうべき楽しさがあり、季節が来ると、潜在意識の郷愁が呼び覚まされ、踊りの恍惚境に浸りたい衝動で参加する

恵原義盛「奄美の八月踊り－その形態と発生のことども－」

※　実際に踊ってきた当事者の八月踊りへの想い

『奄美大島の八月踊り』より

「歌は恋の歌…歌も踊も好きだから、覚えられた…」

『奄美大島の八月踊り』より

「おばあちゃん達の背中を見て覚えた…踊があるところに生まれて幸せ…」

『奄美大島の八月踊り』に収録しなかった人

「最近島に戻ってきて踊り出した…踊のことは
よくわからない…」

芸能の現場に響く人々の多くの声、想い

５．当事者と外部者の差

- **内部**(*伝承の当事者･演者たち*)**の考え･想い**

  ≠ 外部(*研究者・文化財保護関係者…*)**の見方**

歴史を生きてきた当事者にとっての歴史の意味と、それを観察するものにとっての意味には食い違いがあり、統合の可能性には否定的

外側から見る私が正しくて当事者が間違いだとは言い切れません

川田順三『シンポジウム 歴史と民俗の交錯』

※ *外部者の見方と食い違う、当事者の考えや想いは顧慮する必要はないか？*

※ *当事者の考えや想いと全く無関係に構築された理解は果たして十分か？*

６．新芸能論
柳田国男の「新語論」に注目

- 言葉ほど<u>変化しやすい</u>ものはない
- すべての言葉は<u>過去の新語</u>
- ある時、生活の<u>入り用から受容・創造</u>
- 新語は<u>群の実体験・承認</u>を経て<u>定着</u>

⬇

- 生活に密着した地域の言葉の成立
  ⇒地域毎の多種多様な言葉の変化

新芸能論

- 芸能ほど変化しやすいものはない
- すべての芸能は過去の新芸能
- ある時、生活の入り用から受容・創造
- 新しい芸能は群の実体験・承認を経て定着

⬇

- 生活に密着した能地域の芸能の成立
  ⇒ 地域毎の多種多様な芸能の変化

新芸能論の発想

- 新芸能論は、自らが担う文化の取捨選択の権限を、当事者*(地域の人々)*の主体性に優先的に認める<u>分権の発想</u>

新芸能論の立場では…

※「外部(研究者…)の認識 ＞ 演者たちの声・想い…」は、必ずしも妥当とはいえない

加えて…

※ 多種多様な各地の民俗芸能の分布が、<u>各地の人々の主体性によって生み出され、変化してきた芸能</u>として、理解可能に

7．新芸能論と郷土研究

我々は、郷土を研究しようとしていたので無く、郷土で或もの、殊に、一団としての過去の経歴を、各自の郷土において、郷土人の意識感覚を透して、学び識ろうとした

柳田国男「郷土研究と郷土教育」

※「郷土で」研究＝ 地域の人々の生活意識・感覚に即して、歴史や文化を研究

⇒ 地域の人々の立場を尊重する分権的な視角

芸能に即していえば…

※ 各地でその芸能を演じてきた人々の意識や感覚を重視

新芸能論・郷土研究が目指す
よりよい地域文化の理解

- さまざまな声に耳を傾け、さまざまな声を響かせる
- 地域内外の様々な立場の人々の考えや意見が交わされる契機となる
  ➡ *研究者の知見は、多くの理解がある中の一つ*
- 地域の人々が、自ら生活・歴史・文化を考える契機となる
- 将来地域の人々が過去を顧み、地域の歴史を自ら考える材料なる

  ➡ *現状の精確な記録・保存*
- 理解を「定説」化せず、絶えざる更新を目指す

  ➡ *伝承(変化)のあり方を地域の人々が決める、分権的で多様な文化・歴史の認識の構築*

郷土研究の陥穽

陥りやすい速断…

自らの地域の珍しさを強調したり、ありふれていると思って、注意を怠る

郷土研究は、郷土の人々による区画的分担の必要を意味するのみで、孤立してはその効を奏し得ない

柳田国男「郷土生活の研究法」

- 自文化中心主義や地域エゴイズムを克服する必要性
  - ➡ ほかの地域との連携と比較
  - ➡ 断片的な理解の普遍化

※ *参照・比較の対象としての外部からの視角の重要性*

８．よりよい理解としての郷土誌

郷土誌は、個々の郷土が如何にして今日有るを致したか、又如何なる拘束と進路とを持ち如何なる条件の上に存立して居るかを明らかにし、其志ある者をして此材料に基いて、どうすれば今後村が幸福に存続して行かれるかを覚らしむるやうに、便宜を与えなければならない

柳田国男『郷土誌論』

※ 郷土誌 ＝ 地域の生活・歴史の記録

＋地域の人々がより良い生活を実現する契機となる書物

郷土誌としての『奄美大島の八月踊り』

- 番組は、八月踊りの記録に止まらず、人々が、八月踊りを将来よりよいかたちで実現していくことに繋がる、「八月踊りの郷土誌」を目指した
- そこで、番組を実際に八月踊りを踊ってきた各地の人々に見てもらい、意見や感想をうかがった

⬇

- 各地の人々が番組を見て、自らの踊りを改めて見直し、将来的の踊りのあるべき姿を考えるようになったかを検証

※ その後、奄美大島周辺の鹿児島・喜界島・徳之島・沖永良部島でも行った

９．番組を見た人々　(1)八月踊りへの想い

- 学生時代から八月踊りが好きで、休みで島に帰ると、海岸に出て、洗面器を叩いて踊ったことは、本当にいい思い出
- 番組で、若い女の子が、踊りや歌は聞いて、見て覚えるといっていたが、あれは、私どもの踊りの場合でも極めて理想的
- 番組に出ていたおばあちゃんの話は一番貴重な証言。全島の後継者の方々が話を聞いて、歌や踊りを習ってほしい
- 昔からの風習を掘り起こし、伝えていくのは、先祖に対する私たちの責任。八月踊りの歌の「シマグチ」は、本当に大事にしなければいけない

※ 番組を見て、八月踊りに対する自らの想いの深さを改めて意識したといった、肯定的な意見や感想が多い

※特に、番組の中の女性たちの話に共感する人が多かった。上映中に彼女らの話に拍手が沸くこともあった。

⑵ 踊りの違い

- 各地の八月踊りには共通の曲目が多いが、番組を見ると、歌詞が全て同じじゃなく、場所毎に違うことに気づく
- 踊りも、細かいところが共通していない。近い場所の間でも、なぜこのような違いが起こるのか不思議だ
- 私は、笠利や龍郷の踊りを今日番組で見て、解説もあって、初めて違いがわかりました
- 場所毎に踊りや歌が違っていて、それが八月踊りの継承の大きな問題である。歌や踊りを将来的にどういうかたちにしていけばいいのか、そんなことを、今悩んでいる

※八月踊りは各地で同じ時期に踊られるので、番組で初めて他所の踊りを見て、自らの踊りの特徴や他所の踊りとの差異を認識した人も多かった

※他所と自らの踊りの違いに気付き、自らの踊りの独自性を大切にしなくてはいけないと、人々が考えるようになった

（3）人々の違和感

- 私の集落は全員参加で踊っていて、それが、お年寄りを大切にするという意味でとても大事なのだが、それを番組で伝えて欲しかった
- ナレーションが気になった。ナレーションの発音が良くない。そのままで映像に残ると誤解が生じる恐れがあるのではないかと、非常に心配になる。地域の言葉の表現は非常に難しい…

※年配者と八月踊りの関係は、気が付かなかった。今回の取材と番組の最大の反省点である

※言葉の問題は多くの指摘きがあり、地元の人々には違和感が大きかったようである。地域独自の言葉や発音に関しては、なかなか適当な表現の方法が見付からず、今後の課題である

（4）人々の悩み

- この場には、実際に踊っている方がいると思うが、踊りと歌をうまく習得していくための手順があったら是非教えてほしい
- 八月踊りを学校教育の一環に取り入れてもらっているが、問題もある。学校では、男女の恋歌や性的な歌は教えない。そこを、地域でどう補って踊りを伝承していくか苦慮している
- 私の所では、女性は太鼓や踊りはできるが歌ができない。男性は人数が少ない。同好会を作って定期的に練習するなど、手探りでやり方を探っている。踊りをなんとか続けていきたい

※ 踊っている人々は、ほとんどが踊りを続けていく苦労や悩みを抱えている

※ そうした苦労や悩みは、各地域が、過疎化・高齢化・少子化といった問題に直面していて、地域社会としての存続自体が容易ではない状況にあることの現れ

（5）人々の工夫

- 私のところでは、歌詞を漢字と仮名で書いて、奄美の方言をルビで加えている。漢字だと、方言の意味がよくわかる。漢字のテキストを使うと、老人から青年まで同じ歌詞を学べる
- 踊り方を撮影したDVDを作って、それを見せながら踊りを練習すると、割と簡単に覚えられる
- 他所から嫁いだ女性たちを月に一度集めて勉強会をしている。歌を教えてから太鼓を教えると覚えやすい
- 若い人たちに責任を持たせて踊りを全て取り仕切らせると、彼らはすぐに踊りを覚える

※ 番組を見た後には、踊りを続けていく際の困難な問題の解決に向けて、自らの様々な試みを紹介する発言が相次いだ

※ 踊りの教授法を、従来のやり方を改めて、新たな工夫を試みる人々が各地に見られた。その中には、定年退職で郷里に戻ってきた人もいた

⑹ 人々の提案

- 各地域の歌詞を本にして図書館に置いたり、各域同士で定期的に連絡を取り合ったりして、お互いの踊りをもっとよく知ることができれば、八月踊りは島全体でもっと盛り上がるんじゃないか
- 八月踊りを島以外の人々にも広く知ってもらうために、番組を販売してほしい

※ 各地の人々のネットワークを作ろうという提案は注目される。従来、各地の人々が集まり、意見交換することはなかった。

※ 民博製作の番組上映と意見交換を経験して、人々が、そうしたネットワークが踊りの実践に役に立つと感じたと思われる

※ 番組の販売は、いろいろ難しい問題があり実現していないが、DVDを島内の図書館や資料館などに送り、無料で見られるようにした

10. 新芸能論の視角
フーテンの寅さんのように…

- **我々の芸能の<u>見方は決して自然なものではない</u>**

※ *我々は常に、何らかの枠組みを仮設し、それに基づき理解*

➡ *しかし、その枠組みとしては、「文化財」や「伝統」は一種のイデオロギーであり、あまりにも危うく頼りない*

そこで…

- **<u>「それをいっちゃあおしまいだよ</u>…」**

※ *それが、「文化財」だから、「伝統的」だから、といいたくなるのをこらえて、それに頼らずに、自らの意志と責任において対象と向き合った先にこそ、芸能のより良い理解が生まれるのでは…*

１０．新芸能論の視角
変化をいとわず…

柳田の言葉に関する理解…

- 言葉の<u>変化は不可避</u> ⇒ <u>よりよい方向に変化させる</u>べき
  言葉の歴史の解明 ＝ 変化の法則・言語能力の解明
  ⇒ 将来のより良い変化の実現に益する

芸能についても同様に…

- 芸能の<u>変化は不可避</u> ⇒ <u>よりよい方向に変化させる</u>べき
  芸能の歴史の解明＝変化の法則・芸能上演の能力の解明
  ⇒ 将来のより良い変化の実現に益する

※ 昔(歴史)を知る ≠ 保守主義、<u>変化の可能性を期待</u>
「<u>社会はまだ幾らでも賢くなることが出来る</u>」(柳田國男)

10. 新芸能論の視角　誰のための芸能か…

多良間島の八月踊り

文化財：古典芸能・民俗踊り

vs 文化財でない：お遊戯の踊り・歌謡曲の踊り…

10. 新芸能論の視角
誰のための芸能か？

- 指定文化財・観光資源・世界遺産…としての地域の民俗芸能は、先ずは誰のものか？

※ *指定文化財・観光資源・世界遺産…を決めるのは誰か？*

- 指定文化財・観光資源・世界遺産…となった民俗芸能を、地域の人々は楽しんでいるか？

※ *地域の中で、代々伝え、毎年演じる煩雑ささえも…*

- 民俗芸能を伝え、演じ続ける際の主体性は、先ずは誰に認めるべきか？

※ *第一義的には、当事者である地域の人々に*

＝ 新芸能論の基本